



お茶大子ども学
ブックレット

Vol. 3

第5回
お茶大 *ECCELL* 子ども学シンポジウム
2012.6.23

絵本の挿絵について

<講演>

黒井 健氏 (絵本作家)



「お茶大子ども学ブックレット」について

このブックレットは、お茶の水女子大学ECCELLプロジェクト（国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning）が発行するものです。本事業は、学生と社会人がともに子ども学すること、子ども学を生涯学び直すことをとおして、大人が成長していく場を創造することをめざしています。ECCELLで企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共有するために、ブックレットの形で発行し、学びの輪を広げたいと考えます。

* 『お茶大子ども学ブックレット』は株式会社ベネッセコーポレーション寄付金により作成されました。

目次

開会挨拶 および 講演者紹介 5

〈講演〉

黒井 健氏 7

質疑応答 33

第5回 お茶大ECCELL子ども学シンポジウム

テーマ…絵本の挿絵について　～絵本作家 黒井健氏をお招きして～

日　　　時…平成24年6月23日（土）16:45～18:00

会　　　場…お茶の水女子大学 共通講義棟1号館3階304室

総合同司会…菊地 知子（お茶の水女子大学ECCELL 講師）

登壇者…黒井 健氏（絵本作家）

【開会挨拶 および 講演者紹介】

菊地 それでは時間になりましたので、第5回 ECCELL子ども学シンポジウム始めさせていただきます。初めに ECCELL についてリーダーの浜口順子より説明をさせていただきます。

浜口 みなさん、こんにちは。ようこそおいでくださいました。お茶大の中には大学はもちろん大学院、それから社会人の方を対象に開講しております夜間のプログラムもあります。学内には附属幼稚園やいずみナーサリーという保育所もあり、いろいろなところで保育や幼児教育のことを考える、そして学ぶ活動しておりますのが ECCELL です。今後もシンポジウムや社会人プログラムなどに興味を持っていただければありがたく存じます。どうぞよろしく願います。

菊地 それでは黒井健さんのお話に移りたいと思います。みなさんは『ごんぎつね』という絵本をとってもよくご存じだと思います。実は黒井さんは『ごんぎつね』だけでなく、パール・バックの文章に絵をつけていらしたり、山田太一さんが初めて出された絵本に挿絵を描かれていたり、『私のイーハトヴ』という、宮沢賢治の詩に絵と文章を添えたご本を作られていたり、非常にいろいろな分野で、いろいろな色合いのお仕事をされている方です。テキストを書かれた方の思いとまさに対話をするように、一緒にその本を作っているようなお気持ちで絵を描かれているというのが私の印象で、今日はその方のお話を伺えるということで私自身がわくわくしています。それでは黒井先生、どうぞよろしく願います。

〈講演〉

【絵本作家 黒井健氏】

「絵本の挿絵について」

ご紹介いただいた黒井です。黒井健は本名です。今日はタイトルにもありますように「絵本の挿絵について」という話をさせていただけます。最初に「よい絵本と悪い絵本」についてのお話から入っていきたいと思います。ただ、私もまだ現役で、評論家でもありませんので、どなたかの絵本をさしてこれは悪い絵本で、私の本をさしている絵本です、というわけにはいきません。実は私が挿絵を添えさせてもらった本が300冊ぐらいありまして、そのなかで最も版を重ねているもう百万部に近い本が『手ぶくろを買いに』です。これが1988年に出ました。その十年前に、実は私も忘れていたのですが、『手ぶくろを買いに』を一度描いておりました。他にも、時を変えて二度、同じ本の挿絵を描いたということが幾度となくあるので、その対比から入っていきたいと思います。

「よい絵本」と「悪い絵本」

「悪い絵本」というのは語弊もあるかもしれませんが、ちょっとショッキングなタイトルになっていますが、ご判断いただければと思います。

最初に『かさじぞう』。2005年と1995年とに描かれた絵本があります。お気付きの方がある



かと思うんですが、先に描かれたものは、どのお地藏様も錫杖をもっています。後に描いたものは、一番左端のお地藏様だけが錫杖を持っていて、他のお地藏様は玉やお数珠などいろんなものを持っています。ただただ合掌しているお地藏様もおります。どうしてこうなったのか。1995年の段階で私は、六地藏という言葉に関して何も反応せず、ただ六体あればいいと思っていました。2005年の時に初めて「あれ？」と思いました。それで編集の方に「六地藏って何か意味があるの？」と聞いたら、「あると思います」と。2005年というのはもうすでにパソコンで検索ができた時代でしたので、すぐに検索をして荻窪の方のお寺に取材に参りました。その時に初めて、慈悲の違いを表したものが六地藏であることに気がついて、2005年版のように六体それぞれに持ち物の違うお地藏様を描きました。作家や編集者がその作品とどのように付き合うかによって物語の解釈が変わり、表し方が変わるといつの例です。

そして『手ぶくろを買いに』です。これは、新美南吉さんが20歳の時に書かれた作品で、その時代（1930年代）の帽子屋さんをどこに設定するかでずいぶん悩みました。調べてみると、彼が通っていた東京外国語大学が当時御茶ノ水にあって、お友だちが残した随筆の中に、神保町で本を見て歩いて遊んでいた文学論を交わしたりしていた、という記述があったので、神保町を取材しました。現在の神保町は区画整理が終わっていて当時の様子とは違いますが、戦災に遭わないで大正モダンに近い建物が残っていましたので、それを取材しながら描いたのが1988年版の『手ぶくろを買いに』です。

その10年前、1977年にも『手ぶくろを買いに』の挿絵を、保育月刊誌に描きました。当時の私は、

外国のデザイナー的な作家さんにあこがれていましたので、三角形をもとにして重ねていってデザインするような、「積み立て構造」で描いていました。こぎつねが初めて雪を見て「まぶしいよう」というような光が重要であるはずのシーンでも、あまり光や陰影を気にしない描き方をしています。保育月刊誌では当時、シンブルな形と明るい色合いというものが常に求められておりましたので、それに沿って描いたのだらうと思います。

初めて雪の中を歩いたこぎつねが、「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする。」というシーン。1977年版の絵では、お手々がちんちんしていますが、1988年のものでは、文章で十分書かれていて感じ取れることなので描いていない。文と絵というのは、基本的には一緒に経験されるもので、ピアノとバイオリンの二重奏のようなものかもしれない、両方が同じ旋律を奏でてでも意味がない。つかず離れずその曲を演奏していく、というのに近いものではないかと、私は1988年の時に思っていました。

一方で、保育月刊誌の中には絵を読み取るという要素があったため、1977年には、物語に書かれているより細かく、例えば、冬なので寝床を暖かくするための落ち葉や、蛙（さけ）をつるして保管してあるような様子を、子どもが絵を読み取るためのサービスとして描き込みました。

次は、お母さんが町の帽子屋さんまで手袋を買いに行こうとしたのだけれど、お母さんは昔人間にひどい目にあつて、足が動かなくなつた。じゃあほうや、人間の手にかえてあげるからあなた買いに行きなさい、というシーンです。私はたいへん妙な話だなあと思いました。それだけ恐ろしいところに、たかが手袋のために子どもを出すのかという、不適さを感じてはおりました。ただ、全体に人間不信から

信じることを取り戻していくための物語なのだと考えたときに、気にしないことにしようと思って描いたシーンですね。10年前の私はここに矛盾を感じていなかったもので、手を描き、お母さんも割と気楽にじゃあ行つてらっしゃいねと見送っています。このこぎつねも二本足で立って行くのですが、よくよく考えれば、手袋だけでいいのだろうかと思つたりですね、足は冷たくないのだろうかと思つたりですね、それなら靴も買つていらつしやいと思つたり…。

それから帽子屋さんに着いて、戸をからりと開けてもらつて、雨戸を開けてもらつて、手を差し出すシーンですね。「光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。」という文章のシーンです。ここでも先ほどお話したように、お話にはない雪だるまが入つて自転車屋さんがあつて、眼鏡屋さんがあつて、ポストがあつて…と、読みとりのための配慮を加えて描いています。文章に描かれているシーンだけでいいのですが、いくつかの要素を与えて描いた。ただ、そうすると、その物語が薄れていくというのですかね、緊張感みたいなものがどこかこう、四散していく。

それから帽子屋さんのシーンです。1988年には、戦前に神保町でもし帽子屋さんをやっていたらどうなるだろうと考え、ちょっと日本人離れたおしゃれな帽子屋さんをデザインしました。その10年前には、そういう発想をしなかった。かわいく面白くすることを考えていたんだろうと思います。保育月刊誌として、読み取るための絵を期待されますから、置いてある小物や品物の彩りなど、読み取りのためのいろんなことがサービスとして描かれている。帽子屋さんもかなりひょうきんな感じに、明るい描き方というのを目指して描きました。

そして最後にお母さんが「ほんとうに人間はいいものかしら。」とつぶやくシーンです。「月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました。」という文章を映像化したものが88年版ですね。一方、10年前の絵では二本足で立って、帰っていくというシーンになっていきます。絵本のなかで動物は常に登場しますけれども、それを二本足で立たせるか、四つ足で歩かせるかというのはその都度物語によつて変わります。二本足で立たせたときには比較的洋服を着ています。二本足で歩きながら裸であるという、ここで、やつぱり足が冷たかろう、とは思わなかったのですね。物語の本質みたいなものを読むようになって、同じ作家の描いたものと思えないというくらい、絵の表情とか雰囲気が変わりました。ここまで変化するにはどういったプロセスがあったのかを少し私なりの分析でお話しします。

それまでの仕事

私が初めて絵本に会ったのは学習研究社の絵本編集室でした。そこで保育月刊誌、つまり『キンダーブック』とか『チャイルドブック』の競合誌みたいなものの制作に従事し、編集者として2年ほど過ごした経験を持っています。そのあと、本当は一生勤めるつもりでいたのですが、どうしても自分で一日じゅう絵を描いていたくなって、2年ほどで辞めてしまった。その頃は、自分に絵本を描くとは思っていませんでした。かわい絵が描けるとは思っていなかったのです。当時はいもうとようこさんや五味太郎さんもデビューしていた時代で、とにかくそういうかわい絵が自分に描くとは思っていませんでした。ですから、まさか今、みなさんに絵本についてお話しすることになろうとは想像もつかなか

1977—1979 学習雑誌

ったと思います。ただ、辞めたあとに、学研の先輩たちや同僚たちが本当に助けてくれました。生活が大変だろうからといろいろな仕事をさせてくださった。そのうちのひとつがワークブックのイラストの仕事です。この仕事で、何が描かれているのか誰が見てもわかるように描く、といった経験をして、本当にモノをよく見て、どうやって描こうかを悩んで、ずいぶん勉強になりました。

ワークブックでは、絵を見て、四角いマスに字を入れなさい、というようにすることを。これは結構大事なのです。例えば、鉛筆が鉛筆に見えなければ子どもたちはそのマスの空いたところに文字が入られないわけです。牛とか馬に見えなければマスの中に「うし」とか「うま」とは入れられない。だからそれを象徴的に描いていくのですが、やはり悩んでいましたね。例えば、「せんぶうき」と書くのに「せ」がぬけていて「んぶうき」だとすると、子どもはどうやってたら扇風機だと分かってくれるだろうか、大きな扇風機のとらえ方って、と。今は羽のない扇風機なんかもあったりしますからね。それ描いても扇風機とは言わないでしょう。誰にでも分かるようなものを描かなければならないという一つの大事なことがあります。私は何も描けなかったので、一個一個を象徴化したり、また実物を見たりしながら、学ぶにはたいへんいい場でありました。しかも、最初の頃はモノクロ、白黒の絵の小さい1センチ5ミリぐらいの絵から始まって次第に5センチぐらいとか、それから10センチとか、半ページ、1ページ、そのうちにカラーと順調に成長していくのです。そういうのはなかなかありません。

それからカルタの絵ですね。先ほど申し上げたような洋服を着ている動物がいます。なぜ絵本に動物

が登場するのでしょうか、どうして動物なのですか、と編集長に尋ねたことがありました。すると「絵本だからよ」と答えられてしまいました。あとでゆっくり聞きますと、「人間だとわかりにくいからだ」と言われて、すごく納得したものです。うさぎちゃんであれば次のページを開いても常に誰がキャラクターであるのが子どもたちにはつきりと分かるでしょ、と言われたときに、なるほどなあ、と思ったことがあります。

さまざまな絵本

今は「童画」という言葉がありますけれど、絵本らしい絵というのが、この時代にはやはり喜ばれてはいました。現在もそうですが、かわいい絵というのが、マーケットでは結構それなりに評価を得ていくという時代になり始めたころですね。実は戦前または戦後まもなくは、洋画家さんなり日本画家さんが絵本にずいぶん立派な絵を添えておりまして、むしろ大人っぽい時代がずっと続いていました。戦後、昭和30年代から40年代にかけて少しずつかわいらしい絵が絵本に描かれるようになっていったのです。

その頃、私はいろいろな描き方をしてきました。線で描かれているものだったり、現在の技法が見え隠れしている頃の絵もあります。かわいいですね。私は自分がかわいい絵を描けるとは思っていなかったです、本当に。しかし、こういう仕事をやっている中で、おかしな言い方ですが、いつの間にか私にもかわいい絵が描けるようになり、正直に言いますと、そのかわいさに私は段々だんだん疲れ切ってきます。仕事はおかげさまで本当に忙しく、暇のない、時間のない日々になって、ある年、年間16冊出

版したんですよ、自分が絵を添えた本を。その年の暮れになって、銀座の文教堂に自分の本があるかなと思って見に行ったら、平台にはまず無かった。じゃあ、棚ざしにあるかなと行ったら、一冊も無い。自分の描いた本が一冊も本屋さんに無いということは、どういうことなんだろうか。自分の本が読まれてないことへの疑問がだんだんに出て、絵本に向いていないのではないだろうかと思いはじめたことです。自分の描いた本が一冊も本屋さんに無いということは、どういうことなのだろうか、と絶望したことが、その後の作風や、『ごんぎつね』との出会いにつながる大きな要因となっていくのです。

「ころわんシリーズ」

もつとも、今でもその時のかわいさが続いているものも一つあります。「ころわんシリーズ」です。これは現在27作目ですかね。全部が全部、増刊されているわけではありませんが、悩みながら描いてきたかわいさの続いている唯一のシリーズです。「ころわんは、かわいい」ってみなさんよくおっしゃるんですが、ある方が、「でもすっごいブスですよ、ブスでかわいいんですよね」っておっしゃる。そして私の顔を見てくすくすと笑う。どうも私がころわんに似てきたらしい。顔立ちのいい、かわいい顔、っていうのと、造作がかわいくないのに、例えばこう、ちょこんとした目がかわいいとかいうのがありますよね。私がころわんの中で見いだしていいこうとしたのは、たぶんそういう存在のかわいさだったのではないか。人間の赤ちゃんでも動物の赤ちゃんでも、ほんとよくできていますよね、かわいがるように。それは存在のかわいさにほかならない。たぶん保護を必要とする時に、ほんとに大事な要素ではないかなと思います。そういうかわいさが描けないだろうかと続いてきたのが、「ころわんシリーズ」

なのです。

しかし、私自身は読まれていないことへの疑問がだんだんとわいてきており、自分への絶望感というのですかね、絵本に向いていないのではないだろうかと思いはじめました。その絶望感が、絵が変わっていくきっかけになり、先ほどご紹介した『手ぶくろを買いに』を描く2年前に『ごんぎつね』と出会っていくのです。

作品と出会う 『ごんぎつね』

『ごんぎつね』は、昭和30年の前半から教科書に採用された物語ですので、私も知っていました。それまでは、いたずらをしてその罰（ばち）が当たって撃たれて死んでしまったという、大変シンプルな理解をしてたんですが、読んだ時そういう心の状態でしたので、まったくそうではなく、「これはいたい何なのだろう」という驚きから始まり、驚きの連続だった。それまで読んでいた絵本とは全く異なり、主人公が最後に亡くなってしまおうという、ハッピーエンドでない物語。そういうものを私は描いたことがなかった。自分の描いた本を誰も読まないという絶望感の上でのことです。かわいくきれいに描くという既得の方法を失い、どうやって描いたらいいかわからなくなって、初めて作者を調べました。この人はいったいどういう人なのだろうか、どういったメッセージがあるのだろうか、と。つまり自分の描き方を探すというか、作品への接し方を探し始めた、初めての体験だった。それでまず、作者の生まれ故郷に行ってみることにしました。

新美南吉は安城高等女学校に英語の教師として入ったそうです。『ごんぎつね』は彼が17歳の時に、

今でもたいへんよく知られている『赤い鳥』に投稿されたものですね。鈴木三重吉さんという夏目漱石門下生で、もともと小説家の人ですが、その人が編集長として「質の高い童話を」といって編まれたのが『赤い鳥』です。

ごんが、兵十の魚籠からうなぎをとった場所のモデルとなった川に行ったときでした。夕暮れ時で、上空にこう飛行機雲が通っていて、車から降り立つと非常に不思議な感覚がありました。英語でよく「God calling」、「神が呼ぶ」という言葉がありますが、それに近いような何かに包み込まれるような実感がありました。私はそこでスケッチをしないで3日間ほどぼーっと過ごしました。「赤い井戸」と「はりきり」という言葉がわからなかったものですから、それを主に調べていたのですが、その場の空気を吸い、現在もきれいに保存されている彼の生家や半月ほどいた養子先を訪ねました。そこで彼の思いみたいなものを伝記で読みながら、まあ文学散歩に近いことをして帰ってきました。それから少しずつ描き始めていきます。スケッチの上の方に「ほとんど狐しか見えない」とか、つるつるとかどこぼことかというような触感の問題を指している「マチエール」という文字が書いてありますが、そういう風に描きたい、ということですね。実際に絵になったものを見ると、スケッチからはちよつと変化していますよね。

しかし、私は初めてこの『ごんぎつね』を描いたときに、昔描いていた絵みたいに黄色もなければピンクもない、それからきれいな絵がひとつもないことに不安になってしまった



▲ 『ごんぎつね』

(新美南吉作／黒井健絵
偕成社 1986年) 表紙

のです。これでいいのだろうかと思いつながら描きあげてしばらく机の上に置いておいて、文章読むのですが、文章読んでまた絵を見るとこれしかないのですよ。それで、どきどきしながらこれをまたしまつて別な絵を描き始めていくのです。これは（ごんぎつねが）うなぎをとったおかげで兵十のおつかあが死んでしまったのだろうか、悩むシーンですね。すると、これまた相変わらず何の色もないモノトーンの色合いで、困ってしまう。これじゃあ受け取ってもらえないのではないだろうかと思いつながら、それでまた文章を読むのですが、やはりこれしかないのですよ。ここに黄色を加えることもできないし、他の色を加えることもできませんでした。

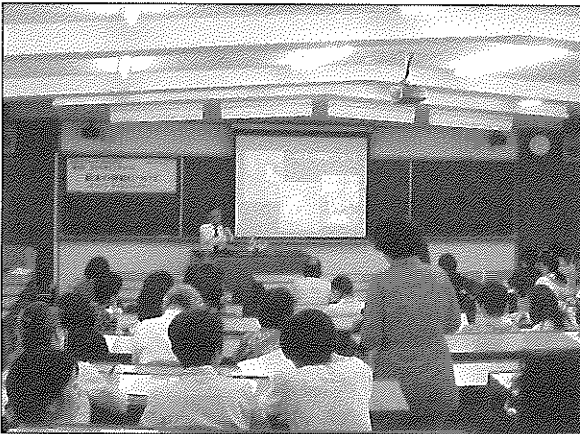
物語の後半で、ごんは償いのために兵十のところにいるいろいろなものを届けます。しかし、前の日に鯛屋から鯛を盗んで届けたことから、兵十はその鯛屋に殴られてしまいます。誰が一体あんなことをしたのだろうか、朝ごはんを食べながら兵十がぶつぶつと言っているところに、また栗やマツタケを持ってやってきたごんが、はっとして、また悪いことをしてしまったと思いついてしまったところですね。常にこれほど文章とラフと作画の間を行ったり来たりして、文章を読み込んでいった作品はないだろうと思つていきます。ちよつとできたものとの、ごんの姿勢を見てください。姿勢が変わっています。これも相変わらずモノトーンの色で、あまり色がありません。

そして最後のページは、撃たれてはったりと倒れたごんのそばにかけよった兵十が、「ごん、お前だったのか。…」というシーンです。右側の納屋の奥に、家の奥に栗やマツタケが見えます。ぱたりと落ちた銃と兵十と、倒れてぐったりとしたごん。この4つの要素が必要なのですが、スケッチの段階では左側に小さく書いていますが、もっと上から見た方がいいのかな、と迷っています。そして出来上がっ

たものでは、ここに栗やまつたけ、倒れたごん、それから兵十、青い煙をだす火縄銃。この本ができてずいぶん何年も経ったときに、ごんについて伺いたいと、質問を受けたことがあります。「このシーンでは、兵十の頭とごんのしっぽが、絵としてわずかに重なっていますよね。これは黒井さんが、心が通じた表現されたのですよね。」と、おっしゃった。それを聞きながら返事したのは、はい、なるほど、と。いや本当にそうなのかもしれないのです。「私は文章を何度も毎回行ったり来たりしておりますので、『ここからこう変わる』というところなのかもしれないませんが、ただ意識はしておりますでした。」と話したら、その方はとてもがっかりされていました。

それまでは、絵本を作るプランを立てて、そのプランに沿って全体の展開、大道具小道具、それから情景も考えていったのですが、この絵本の時は私はすべての手法を失っていましたので、それをしなかった。できなかったといったほうが正解でしょうか。だからなのか、「作った」というより「生まれた」と表現できるような絵本になりました。これを描いて誰にも読んでもらえないなら、絵本をやめようと思って描き上げました。編集の方がただ一言、「おっ」と、小さい声で喜んでくださったのだけが頼りだったのですけれども。

私が一番気に入っているのは、この表紙絵なんです。このまなざしであったり、全体の体の姿勢であったり、自分が描いたと思えないくらい、今でも気に入っております。そして常に、この絵を越



えたい、というライバルにもなっていて、でもいまだに越えられないっていうんですか、昔の、良い時代の私の絵なのかもしれません。

印象に残る作品

駆け足でいろいろな印象に残る作品についてお話をします。

『ミッシェル』

これは86年に「ごん」を描いたあと、ミッシェルに出かけて行きました。テムシー・ラーニングという、セントルイス生まれの私より10歳若いアメリカ人ですが、彼が誘ってくれました。それまで私はカヌーもキャンプもしたことがなく、いきなり行ったという感じでした。『ごんぎつね』を出して自暴自棄になっていた部分もあるのでしようね。86年ですから、結婚もしていたのですが、死んでもしょうがないか、とっていました。それでも奥さんがかわいそうだからと、3つくらい生命保険かけましたかねえ。それで出かけて行ったのがミッシェルだったのですが、30日間カヌーをしました。大きい旅でしたね。我々はたいいてい車とか、かなりのスピードで旅をしますよね。カヌーというのはまるで川を歩くような乗り物なのです。飛行機でどこだったかの町に着いて、そこで車を借りて、最初の出発点まで行って、そこにカヌーを降ろしたのですが、車で6時間の地点だったのです。そのあとカヌーで同じ町を通ったのですが、そのときにはすでに20日間経っていましたから、ものすごく非効率的な時間を過ごしているわけです。しかし、ただ毎日毎日、川を、そして水を見ているのですが、それがまるつきり違う

のですよ。ある日は重く鉛のようであったり、ある日はさらさらと流れるせせらぎのようであったり。空の色を映して本当にこう千変万化して、いつも違う。その空気も湿度もみんな違う。空も違う。それをじれったいくらい進まない乗り物に乗って、なんていうんですかね、その中に浸っていくように過ごしました。2年後に『ミシシッピ』の本を描いた時にひしひしと分かってくるのですが、やはり身体で体験したもの、それからそれを何となく実感したものとというのは体に残ってくれるんですね。記憶に強く、はっきりといろいろなことを覚えていました。ただ過去形になるとだんだん薄らいでエッセンスが残って、絵としてはまた昇華されていきます。ですからすぐには作らずに、だいたい2年は要して作ったり絵を描いたりするのです。

宮沢賢治との出会い

宮沢賢治、大事な人です。最初に読んだのは『銀河鉄道の夜』でした。わからない人ですね。何を書きたいのかわからないです。でも、ただただ心に引かかって、こうずっしりと残るのですね。いったいこの人は何者なのだろう、と。『銀河鉄道の夜』はちつともわからなかったのだけれども、涙がぼろぼろ流れるのです。それで彼を知りたくなりました。彼の心根と詩を見れば近づけるのではないかと思って、苦悩の詩ばかりでしたが、それを持って土地を訪ね歩き始めます。そして生まれてくるのが『雲の信号』と『私のイーハトヴ』です。『雲の信号』は、もともとは偕成社の『MOE』で連載していたものから生まれました。もらった原稿料を毎月毎月費やして、岩手県を訪ねました。四季を通じて見に行きましたので、心の中にしみこんでいくような大変良い時間になってくれました。原稿料を

使った甲斐があつたと思つています。

その後、私は宮沢賢治の年譜ばかりをいくつか読むことで賢治を探ろうとしました。「宮沢賢治論」とか研究書はほとんどが「私はこう読んで、こう惹かれました」という賢治に対するラブレターに近いものだろうなと思つていましたから。しかし『私のイーハトヴ』は実は私の賢治へのラブレターに近いものだと思います。「あなたはこういうことをしたかったのだね。だけどできなかったのだね。」というようなことを思いながら描いた本が『私のイーハトヴ』です。

私は『猫の事務所』と『水仙月の四日』という2冊だけ賢治の絵本を描いております。『猫の事務所』は『ごんぎつね』以降に描かれています。これは完全にプランを立てています。全体の構成、建物を全体に想像していくのですが、まずキャラクターを作るのに擬人化ではだめだ、動物を人間化してはだめだ、と思ひました。それでは年齢も出ないし、性格も出なかつたのです。そこで私は人間を猫化することにトライしていきます。それはホテルで朝ごはんをとったときに、ちよつと垣間見た風景がきっかけでした。会長さん風、社長さん風、真ん中の人、それから部下の人がいて、朝ごはんを食べていたのですが、その年齢差みたいなものも全部山猫に変えていったことが、最初のトレーニングでした。実はそれが『Hotel』として先に出版されることになりました。そのときに描かれたスケッチには、猫の事務所がここに登場して、全体の建物はここが入口で、こっちに資料室があつて2階にも資料室があると想定されています。これは大道具を作ることですが、映画を作っていく時のロケーション・ハンティングのようなものですね。全体のイメージとしては、木と漆喰のひんやりとした感じで、ここから入った正面に事務長がいる、とカメラアングルのように描いていきます。ちよつと上の方から見ると、台

になっていて、また手前から階段が2、3段あつて事務長の前に行く、というように、左右まで全部描いてスケッチを完成させていきます。左側が東の方なので光が入ってくるという想定もされています。そしてこれも小道具の一つの考え方ですが、机や椅子といった家具がみんな「猫足」なのはご愛嬌ですね。『猫の事務所』ですから。

『リリアン』

これは、ずっとファンだった山田太一さんに無理にお願いして書いていただいたものです。あるパーティーで山田さんをお見かけした私はあるうことか名刺を引つ張り出して、つかつかと歩いて行きました。普段そんなことしないのですよ。「私、こういうものです」と言うと、山田さんはとてもいい方で「はい」と聞いてくださるのですね。しかし「絵本をかいとくださいませんか」とお願いすると、「私は絵本、書きませんが」とおっしゃるので「ぜひ私の本を見ていただきたい」と言って、翌日、ごん、手袋、それからイーハトヴも含めてお送りしました。すると3日後にハガキが返ってきて「わかりました。お受けします。」と。それから何度かお会いしましたときに、山田さんは「SF的なものを作りたい」とおっしゃったのですが、私は「それは嫌です。山田先生の小さい頃のことを書いてください。」と申し上げました。エッセイとか随筆の中で小さいころの記憶を書かれたものがあって、そういうことを話しながら書いていただきました。山田さんは浅草にお生まれで、大衆食堂の息子さんなのです。今の六区で場外馬券売り場とか競輪の近いところで、決して環境のいいところではないですけれど、そこを取材しながら描いて、3年かかりました。そのことを対談で山田さんに言ったら、3年と4カ月です、

と釘をさされて、「私よりも長くかかった」と叱られてしまいましたけど。しかし、その後もおつきあいいただけて、本当に優しい方だなあと思っています。私は一番尊敬している方がまどみちおさんなのです。その次に尊敬しているのが山田太一さん。山田さんもまどさんを尊敬しているので、まあいいかな、と思っと思っていますけれど…。

『12の贈り物』

この原本はアメリカのもので、そこには写真が添えられているのですが、それを日本語として出したいと編集の方に言われました。バースデーブックですね。ただこの物語、この文章に出てくる1番目の贈り物は「力」。要するに、生来みんなが持っているものですよ、というメッセージなのです。美しさや勇氣、それ自体はもう聞き飽きた言葉なのですが、なぜかこの本の言葉は響いてくるのですよね。改めてこの言葉自体が新鮮に見えて、ぜひ絵をつけさせてくださいと言って出された本です。これももう10万部くらいになっているのでしょうかね。

『ふる里へ』『きんのいなほ』

私は新潟生まれなのですが、新潟の地方新聞社が中越地震復興のためのキャンペーンとして新聞に連載した『きんのいなほ』がもとになり、その後小学館から『ふる里へ』として出版されました。

復興にかかわるみんなの記事に絵を添えてほしいということだったのですけれども、復興している現場を描くわけにもいかず、私は何を描いていいのかわかりませんでした。ただ、私たちの「ふるさと」

というのは、嘗々と長い時間をかけて作ろうとしたのではなくて、生まれてきた一つの「ふるさと観」なのではないか、偶然生まれた風景なのではないか、と。その美しい風景をもう一回取り戻そうという思いで、私は以前に取材してあったものから、絵を起こしていきましました。やはり新潟生まれで女優の星野知子さんに文章書いていただいていますし、新潟をおおもとにして描いてはおりますけれども、私はあんまり新潟に限定されるとは思ってはいません。人が営みをする基本的な単位はこの集落にあつたり山あいにあつたりするように思っています、その愛おしさみたいなものを描けた大変幸せな時間でありました。例えば、稲穂が植わった水田に夕日が落ちていくシーンです。だいたい私が描く風景は自分が「うわー、いいー」と思ったところを「こんなきれいだつたよ」と言つて描いているだけなのです。そういう絵です。

『LONG NIGHT (ロングナイト)』

自然ばかりでなく都会も人工的なものも、時々立ち止まるほどきれいだなと思つて、惹かれます。『LONG NIGHT (ロングナイト)』もたしか『MOE』か何かでの連載をもとに作ったもので、ちよつと恋愛めいた文章が添えられている本です。これは自然とは違いますが、人々の営みの場にほかなりません。

『およげラッコぼうや』『雲へ』

初めて外国の出版社から依頼されて描いたものです。日本語に翻訳されたものが『およげラッコぼ

うや』となりました。アラスカに行つてその取材をしている間に、『雲へ』という本が生まれていきます。ジェット機であればあつという間に雲を突き抜けますけれども、私たちが乗せてもらった作家さんのおんぼろセスナではなかなか雲につかないのです。そのときふつと子どものある空を飛んだ夢をみた記憶を思い出して、しっかりと取材をしてできた絵本ですね。私は滅多に作絵をやりません。できません、物語が。

『あのね、サンタの国ではね・・・』

これはもともと当時の安田生命によるファミリー向けのカレンダーでした。それを絵本化したものです。絵本にするきつかけとなったのは、カレンダーがまだ使われている月に、知らない方からいただいた電話でした。「あのカレンダーはどこから絵本が出ているのですか」と尋ねられて、「いや、あれはカレンダーのためにオリジナルで描いたものです」と答えたら、すごくがっかりされるのです。「どうしたのですか」と聞いたたら、「子どもが『読んで読んで』って、しょっちゅう壁から降ろしているうちにカレンダーがよれよれになってしまって、絵本を買ってあげたいと思いました」というので、「じゃあ、絵本にしたほうがいいですか」といったら、「お願いします」と。前後をつけて、たまたま来られた偕成社から出版したら、その年のクリスマス絵本のトップを取ったのです。その方には本当に感謝です。

『おかあさんの目』『天の町やなぎ通り』

私の好きなあまみきみこさんの1987年の『おかあさんの目』と2007年の『天の町やなぎ通り』。

どちらもお母さんがテーマになっていきますね。あまんさんの物語というのは常に、ファンタジーに連れて行くときの入口がとても優しくて、読み終えたときの出口もいい心地で、すがすがしいものが残ったままファンタジーから出て行くところとかが私は大好きなのです。ですから、あまんさんから依頼があると、一にも二にもなくオーケーします。その中でもあまんさんにとって大事な物語であろうというのが『おかあさんの目』と『天の町やなぎ通り』。あまんさんは高校生のころにお母さまを亡くされているのですよね。その記憶がずっとおありになるのではないかなという、それが響いてくるようなきれいなお話です。この後もたくさん描いていますけれども、この2冊が特に私は好きですね。

最近の作品

近作をちよつと宣伝しておきますね。まずは『よるのふね』。それまでの手法で描けなかったために10年を要してしまいましたけれども、手法がなかなか変化していきます。それまでは色鉛筆を使っていたのですが、今はオイルパステルという、クレパスに近い画材を使うことが多くなりました。

人気作家の内田麟太郎さんの『だれかがぼくを』です。麟太郎さんはユーモラスな言葉遊びの世界と、それから心根を、自分を通していくような世界と、だいたい2つ持ってらっしゃいますよね。ご自分でもエッセイで書かれていますけれども、母親を殺したいと思ったかという、それを題材として書かれた本ですね。『だれかがぼくを』と、サブタイトル『ころさないで』、これ描くまでに6年かかってしまいました。要するに「殺意を止めるもの」がテーマでした。でも殺意を止めるものって、まあ、母のあた

たかい心というのが結論なのですが、私は人を殺そうと思ったことがなかったものですから、どう対処していいかわかりませんでした。それで自分の中それに似た心を探していくのですね。これに向かっているかいないと、上辺だけを描いてしまうことになるので。私にも昔々一度だけその経験があったことを思い出して、それをもとに描かれた本です。まあもともと難しいテーマでしたからね。絵本らしくない本ですけど。ただ大切なことだと思えます、殺意を、やるかやらないかというのは大きな差です。昨今いろいろな事件が起きていますよね。無差別殺人であったり。やるかやらないかの手前の人もいっぱいいると思いますしね。それを心理から探した、そしてそれについて書かれた内田さんの作品だと思います。

マーガレット・ワイズ・ブラウンの『おひさまとおつきさまのしたで』はベッドサイドストーリーというか、眠るときに読んであげる本ですね。お母さんがいいこいいこする、あつたかい、一番いい時間を書かれたものですね。

薫くみこさんはもともと作家さんですが、絵本を一度やりましようといつてできた本が『赤いポストとはいしやさん』です。薫さんはぎよつとするぐらいい大変な美人なのですよ。おもしろかったのは、私はここに出てくる心優しい歯医者さんをずんぐりとした人のよさそうなキャラクターと、それからすらりとした優男の歯医者さんを書いて、薫さんにお見せして「どっちがいいですか」と尋ねたら、「ハンサムの方がいいわ」とおっしゃったので、ちよつとお醬油顔ですけど、ハンサムな方にしたのがこの

絵本ですね。私の作品にはめつたにすらりとした主人公は出てこないのですけどね。

『かかしのじいさん』。「これは変わった顔ですね。こんな絵を描くのですか。」と言われました。ただ「かかし」はビニールとか平面的な顔ですからこういう顔しかないのですけどね。筆で描いたような顔にしたのですが、私にとっては珍しい絵だとよく言われております。米どころ新潟の方で米を守る「かかし」が次第にすずめのかわいさに負けてすずめを守ってしまうというなかなかかわいいお話です。

最新作が森山京さんの『バスがくるまで』です。この方も本当に登場するものの存在のかわいさを描ける、本当に素晴らしい方ですね。バスが来るまでという、おばあちゃんを迎えにでていった女の子が、いろいろなことに興味をそそられたり感じたりする本当に短い時間の話なのですけれど、かわいいのですよ。それから、にしもとようさんの『うまれてきてくれてありがとう』。1年ですでに8万部近いですかね。びつくりするほどみなさんに読まれて大変驚いているのですけれども、にしもとさんご自身の赤ちゃんが生まれた時に、難産だったそうで、その生まれた喜びを文章にされたもので、私が絵を入れさせてもらったものです。ただ、喜びというものはどうしても、育てている間に遠くなってしまいますよね。それをもう一度思い出してくださるようでいろいろなお手紙をいただいております。どちらもそんなにかわいい絵を描いてはいないのですが、何ですかね、両方ともよく読まれていくのですよ。やっぱりかわいくないといけないのでしょうかね。ただ、私はかわいいものはかわいいと思つて描きますし、かわいくない物をかわいくは描けません。ですから、かわいい絵が描けていたら「かわいいと思つたの

だな」と思ってください。

『ケンタウル祭の夜』は3月に開かれた個展のために描かれたものです。私がいつか描きたいと思っている『銀河鉄道の夜』はいまだに描けないでおりますが、ただ1枚だけ描いたものです。展覧会は震災の1年後、ちょうど3月14日からでした。そこに何かしら心を向けたいと思って宮沢賢治を描きました。もともと私は『銀河鉄道の夜』は黄泉への国への列車だと思っていまして、この星を2万近く、犠牲者の数だけ描きたかったのですが、7千ぐらいしか描けなかつたですね。だからその数が（どれだけいかに）膨大なものであるかということが仕組みられた作品になってしまいました。鎮魂の思いが自然にこもってしまった作品です。

それから、子どもたち向けの賢治の自伝のために描いた絵です。ちょうど亡くなる2、3年前の、ちよつと結核が進んだころの、ほっそりとした影の薄い状態の写真の中から描かれたものですが、『雨ニモマケズ』が書かれたころではないかなと想像しております。実際に『雨ニモマケズ』は病床の手帳から発見されたものだったので、そのころの賢治を描いてみたいと思って描いたものです。

画風について

よくある質問なものですから、画風について紹介します。現在の私の机ですが、パソコンがとうとう真ん中にきてしまいました。資料を投影するのに大変便利なのです。資料を探したり、いろいろな写真

も含めてプリントではなく、私が撮った写真をそのままここで大きく見られるので使っています。

色鉛筆は壁にかかっています。それぞれいろいろな会社のものがあって、色ごとに分かれています。大体40本くらいありますかね。柔らかい色鉛筆、硬い色鉛筆、それからオイルパステルですね。生チョコのように溶けるオイルパステルで、顔料は非常に量が多い。チョコレートと同じですね。純正だとなおさら溶けるような、それを半分溶かします。色鉛筆と同じ手法です。例えばまず、紙に簡単にりんごをスケッチします。そこに粘着性のフィルムをかけ、カッターで輪郭に沿ってりんごをカットします。色をつける部分を外して、別の紙に色鉛筆、これはオイルパステルでもいいのですが、こしこしこしと、パレットに絵の具を出すようにしていきます。白いTシャツの端切れに油絵の具の筆を洗う一番安い油、それを筆に沿って量を調節してちよんちよんと付けます。それをさきほどの部分にさらにこしこしとこすると溶けて付くのですね。平面上から赤をすーっと塗って、手加減でぼかして下からグリーン、黄緑色を塗っていくとりんごの「ふじ」ができますね。ぼかしがここで交差するのです。周りからゆっくり塗っていったんだん手加減をして、真ん中にちよつと白い紙を残すとぴかつと光って立体的になる。

画材を紹介します。マスキングフィルムは薄い粘着性が付いた、半透明のもので、クリーニングオイルでも大丈夫ですが、ペテロールの方が純度が高くて、においがいい物も売っていますので、いいかもしれません。紙パレットは混ぜて、色が作れるのです。絵具をパレットにのせるのと同じ要領。指と場所を変えながらこすってきます。そうすると例えば、雲はフィルムがかかったマスキングされた状態で空が描かれて、後で雲の白いところはマスキングを取って、デリケートな色を薄く付けて立体化して作る。背景色を塗った後に葉を切り抜いていって何度もそれを繰り返し返して葉を作っている。手間のかか

る方法で、大変に難しい。よく発表しますねと言われますが、お見せしても多分できないと思うので。とにかく面倒くさい方法です。合理的ではないですし、プランを立てておかないとなりませぬ。白は完全に紙の白ですので、ホワイトで修正できない技法ですから。

「黒井健絵本ハウス」

2003年に私設美術館をつくりました。もし清里に行かれましたらお立ち寄りください。こちらまりとした、60枚ぐらいしか絵を掛けられない建物ですが、私の好きな建築家の方に設計してもらったものです。4月から11月までしか開館しておりませぬ。12月から3月31日まで休館しております。

長い時間ありがとうございました。終わります。

【質疑応答】

菊地 黒井先生、本当にどうもありがとうございました。何かまだまだ聞いていたような感じですが、きつとみなさんにもいろいろな想いがわいてきて、ああそうだったのかと感じられたことがたくさんあったと思います。どうぞ質問をなさってください。お願いします。

フロアからの質問 どうもありがとうございました。文と絵の関係のお話、大変興味深く聞かせていただきました。聞きながら作詞家と作曲家の関係とちよつと似ているのかなということも考えておりました。

例えば絵本を描くときには、それを見る対象として、母親や保育者や先生など、そういう方を念頭において描かれるのか、それともそれを読む子どもたちを念頭におかれているのか、それとも両方なのか、その辺りを教えてください。

黒井 作品によって、それが目的であるとはつきり分かれれば自然にそういう意識になっていくだろうと思いますが、基本的には誰かのためにとはほとんど考えておりません。その文章と対峙することしか頭がないというのが正直なところかと思えます。その文章を私がどう解釈



し、どう絵として一緒にいいか、その文の説明ではないいい絵を描けるかということなのです。私はこういうふうに読ませていただいた、という「感想文」ではなくて「感想絵」になっています。その間に読者を意識することはあまりないのですよ。その物語で心が動いた部分に私がどう付き合うかということしか考えていないところがあります。私の弱いところかなと思います。

菊地 ありがとうございます。これまでも黒井さんの本を見ているときに、テキストを書かれた方の思いとの対話というか、真正面から応答してテキストが描く世界に絵をぶつけるようなイメージがあったのですが、お話を聞いていて改めてそうなのだなと思いました。

私の方からは、今回「子ども学」シンポジウムということですので、それに引きつけてひとつお聞きしたいと思います。ご自身が言葉を書かれている場合もありますが、だいたいは言葉を書かれた人とのコラボレーションというか、そういう中で表現されると思います。先ほど読み手は意識されていないことでしたが、それでもやはり受けとめる者というのは、どうしても表現の中に入ってくると思うのですね。もちろん私たちのような、年齢的に子どもではないコアなファンもたくさんおりますが、絵本の場合は受けとめる者が子どもであることが多いと思います。受け取り手であり表現の共同者であると思われる子どもからの黒井さんへの応答のようなもので、何か心に残ったものがあれば教えていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

黒井 あまり子どもと付き合ったことがないのですが、今年の春でしたか、幼稚園の年長さんと「お絵

描きの仕方」というワークショップをやってきました。子どもたちに話しかける、それからその素材を提供するというのは、抽象的ではなく、子どもたちが理解できるように、できるだけ具体的に子どもたちの言葉で、それまでの知識なり経験なりに沿ったものでなければならぬということはあるのですが、作品によりますよね。もともと自分の心の中で考えるようなものを大人に話すときと、子どもたちに話すときと自ずと違いますよね。そういう調節を自然としているのかもしれないませんが、子どもだからといって、じゃあかわいくすればいいのかとか易しくすればいいのかというと、たぶんそうではないですよ。例えば、重要な栄養素のある料理をできれば食べてもらいたいのであれば、嫌いでも喜ばなくても食べてもらわなければいけなくなりますよね。それに近いことではないかなと思ったりしています。何もすべて甘くする必要はないし、かわいくする必要もないし、そのまま食べてごらんって言うて、それは大事なことなのだよということを伝えていくのも重要かと思えますし。今日最初に話したつもりなのですが、くだけすぎではならないというその趣旨が、本来の目的からずれてしまうのではないかということは、この40年間、私の中の迷いであつたり自問自答しながらやっているところで、今のところそういうつもりです。

菊地 どうもありがとうございます。閉じてしまうのが惜しいようですけれども、今日は本当にたっぷりと画像も見せていただきながらお話を伺えて、いい時間をみなさんと過ごせたと思います。黒井先生、本当にありがとうございます。

お話の中にでてきた作品の出典

- 『かさじぞう はじめてのおはなし絵本 20』1995 黒井健 絵 講談社 (販売中止)
- 『かさじぞう』2006 作：松谷みよ子、絵：黒井健 童心社
- 『手ぶくろを買いに』1978 チャイルドブック チャイルド本社
- 『手ぶくろを買いに』1988 作：新美南吉、絵：黒井健 偕成社
- 『ころわんシリーズ』作：間所ひさこ 絵：黒井健 ひさかたチャイルド／チャイルド本社
- 『たんぎつね』1986 作：新美南吉、絵：黒井健 偕成社
- 『ミシシッピ』1988 絵：文：黒井健、文：T・ラニング 偕成社
- 『雲の信号』1995 詩：宮沢賢治、画：黒井健 偕成社
- 『私のイーハトヴ』1997 詩：宮沢賢治、画・文：黒井健 偕成社
- 『猫の事務所』1994 作：宮沢賢治、絵：黒井健 偕成社
- 『水仙月の四日』1999 作：宮沢賢治、絵：黒井健 三起商行 (ミキハウス)
- 『Hotel (ホテル)』作：絵：黒井健 1992 河出書房新社 2006 瑞雲舎復刊 (『新装版 Hotel (ホテル)』)
- 『リリアン』2006 作：山田太一、絵：黒井健 小学館
- 『12の贈り物 世界でたったひとりの大切なあなたへ』2003 作：シャーリーン・コスタンゾ 絵、訳：黒井健 ポプラ社
- 『ふる里へ』2006 文：星野知子、絵：黒井健 小学館
- 『さんのいなほ』2006 文：星野知子、絵：黒井健 新潟日報社 (非売品?)

- 『LONG NIGHT (ロングナイト)』 絵・作：黒井健 1995 河出書房新社 2007 瑞雲舎復刊
- 『およげラッコぼうや』 1993 作：カールストローム、絵：黒井健、訳：工藤直子 偕成社
- 『雲へ』 2002 作・絵：黒井健 偕成社
- 『あのね、サンタの国ではね・・・』 1990 作：嘉納純子、絵：黒井健 偕成社
- 『おかあさんの目』 1987 作：あまんきみこ、絵：黒井健 あかね書房
- 『天の町やなぎ通り』 2007 作：あまんきみこ、絵：黒井健 あかね書房
- 『よるのふね』 2011 作：山下明生、絵：黒井健 ポプラ社
- 『だれかがぼくをころさないで』 2010 作：内田麟太郎、絵：黒井健 PHP 研究所
- 『おひさまとおつきさまのしたで』 2010 作：マーガレット・ワイズ・ブラウン、絵：黒井健 教育画劇
- 『赤いポストとはいしゅさん』 2009 作：薫くみこ、絵：黒井健 ポプラ社
- 『かかしのじいさん』 2009 作：深山さくら、絵：黒井健 佼成出版社
- 『バスがくるまで』 2011 作：森山京、絵：黒井健 小峰書店
- 『うまれてきてくれてありがとう』 2011 作：にしもとよう、絵：黒井健 童心社
- 『宮沢賢治 本当のさいわいをねがった童話作家』 2012 文：西本鶏介、絵：黒井健 ミネルヴァ書房

第5回

「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業
(**ECCELL**)

お茶の水女子大学 **ECCELL**

子ども学シンポジウム

絵本の挿絵について
～絵本作家 黒井健氏をお招きして～

日時: 2012年6月23日(土)
16:45~18:00

会場: 共通講義棟1号館304室

詳細はこちら



お茶大 **ECCELL**

検索

nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

お茶大子ども学ブックレット Vol.3

2014年3月 初版発行

発行 国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯
学習モデルの構築」(**ECCELL**)

浜口 順子

編集 菊地 知子・寄藤 陽子

連絡先 〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学本館 335 室

TEL&FAX 03-5978-5663

E-mail nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

URL <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/>

印刷 光写真印刷株式会社